

故 名誉館長 飯田宗一郎氏をしのぶ会のご案内

去る1月26日、大学セミナー・ハウス名誉館長飯田宗一郎氏が逝去されました。

当ハウスでは、日ごろご厚誼を賜りました皆様方とともに「故名誉館長飯田宗一郎氏をしのぶ会」を下記の通り執り行い、氏を偲ぶためのひとときを持ちたくご案内申し上げます。

日時・場所 平成12年10月1日(日) 13:30~16:30
大学セミナー・ハウス
受付開始 (於本館フロント) 12:30
しのぶ会 (於講堂) 13:30~15:00
弔辞
思い出を語る
記念の集い— 茶話会(於本館食堂) 15:30~16:30
お問合せ先 大学セミナー・ハウス 企画・経理課

TEL: 0426-76-8532 (直)
0426-76-8511 (代)

理事長：中嶋 嶺雄 (東京外国語大学学長)

館長：絹川 正吉 (国際基督教大学学長)

対 談

新しい 大学セミナー・ハウスを語る

(平成12年8月9日)

司会 大学セミナー・ハウスでは、今年6月1日、理事長に東京外国語大学学長の中嶋嶺雄先生を、館長に国際基督教大学学長の絹川正吉先生をお迎えしました。そこで今号の「ニュース」では、お二人のご紹介を兼ねて、大学セミナー・ハウスについての対談をお載せすることに致しました。まず、大学セミナー・ハウスとの関わりについてお話しただけです。

「大学を聞く」(大学セミナー・ハウス創設史)の中にも出てきますが、飯田さんは当時の大学の状況に対して非常に危機感を持っておられ、これでは日本の大学教育はだめだということから大学セミナー・ハウスを発想するわけですね。そういう今の日本の大学のあり方に対する批判の原点には、日本の大学史の中で非常にユニークな出発をしたICUがあったと思うのです。おそらく、飯田さんのICUにおられた経験がこういう批判的視点に立つことに役立ったと思います。飯田さんはICUのスタッフでしたから、飯田さんご自身を存じ上げたのは、私がICUに勤めた一九五五年からです。飯田さんとは45年もお付き合いがあったということになります。

創立者の業績

司会 今年1月26日に亡くなった創立者の飯田名誉館長について、大学セミナーハウスの歴史的なことも交えながらお話しただきたいのです。

中嶋 私は飯田さんを存じ上げて30年程になります。飯田さんは非常に個性的で、人間として大いに尊敬すべき人でしたが、それだけにまた唯我独尊ともわがままとも言える面があり、逆に立ち上ることがあったからこそ、これだけの施設を立ち上げることでできたのではないのでしょうか。クエーカー教徒で、奉仕の気持ちがあつて、おそらく絹川先生がおっしゃったようにICUという、キリスト教理念の私学の影響もあつたのではないかと。

絹川 同志社を卒業され、クエーカー教徒であつたことが、大学セミナー・ハウスを発想することに影響していると思います。

「セミナー・ハウス」という言葉は飯田さんの創作です。今では「セミナー・ハウス」は普通名詞になっていますが、それまでは「セミナー・ハウス」という言葉はなかったのです。そして、ただの「セミナー・ハウス」では心もとないし、「学生セミナー・ハウス」では事柄が限定されすぎるというので、「大学セミナー・ハウス」ということになった。それが目的とする性格を表現し尽くせないので、英語名で補完して、INTERNATIONAL UNIVERSITY SEMINAR HOUSEとしました。この英語名のアイデアをICU英語教授の清水護さんからいただいたのだそうです。今は単位互換など大学間の交流が盛んですが、当時はそのような発想が全くなく、そういう時にインタユニヴァーシティということ発想したのは飯田さんの大



▲中嶋嶺雄理事長

大きな功績です。また大学セミナー・ハウス設立には、教員と学生とのコミュニケーション、交わりや人格的な影響という点を非常に重く考えて、それが実現していない日本の大学教育に対する厳しい批判が発想の原点になっています。

中嶋 日本の社会全体の悪い点ですが、一度その学都や学科に入ってしまったと、卒業後もずっと自分の経歴になって、縦社会の中で暮らさなければならぬ。それをまさに横断的に切り開くわけですね。大学セミナー・ハウスの丘にすれば、そういう大学間の壁を取り除いて、皆が睦まじく学べる。当たり前のようにありますが、日本の教育現場ではなかなか実現しなかったことです。それを去年近く前に発想したというのは驚異ですね。

絹川 飯田さんが我々学者と違う点は、やはり実行の人だということですね。

中嶋 そうです。飯田さんは学者ではなく、ICUの就職部長という大学の事務職員だったわけですね。その前は東京女子大学の事務局長でした。中嶋 大学の事務職員でこういう発想を持ったというところに非常に意味があると思います。先日、大学セミナー・ハウスでSD (Semi-Development) 大学職員研修プログラムを開催しましたが、大学では事務職員の識見が非常に重要なのです。飯田さんほどの識見を持った事務職員は少ないと思います。

知のネットワーク

絹川 発想が時代を先取りしていたということでしょうね。あの当時の、教員中心の大学という時代の中で、スタッフの側からクリティカルに大学の状況を見て、それを何とか克服しようと大学セミナー・ハウスという発想にたどり着き、それを創ってしまったという実行力、これはやはりすごいと思います。しかも、この大学セミナー・ハウスの発想には、二面あります。一つは、大学の教員が学生と寝食を共にしながら学習をする「場」を提供する、すなわち宿泊施設を提供するという事業。もう一つは、最初からその当時の日本の大学の錚々たる先生方を中心に据えた「企画委員会」というものを作り、現在の「大学共同セミナー」などさまざまなセミナーの原点になるような催しを行ったことです。常に、その当時のエスタブリッシュメントとも言える、一般の知性の人にコンタクトを取って中心に据えたのです。私が館長就任をお受けした理由の一つは、大学セミナー・ハウスが築き上げてきた知のネットワークというも

のを崩してはならない、これを大事に守り育てなければならぬと感じたからです。その知のネットワークの原点が創立当時の「企画委員会」です。ですから、大学セミナー・ハウスには単に学生と教員の交流の場を用意する施設としての役割だけでなく、そのようなプログラムを用意するという重要な面があるわけですね。

中嶋 そうですね。したがって、主催プログラムの企画というものが大学セミナー・ハウスでは今後一番重視されなければいけないと思います。絹川 もう一つ、「企画委員会」にはいろいろな分野の先生方が集まりますから、おのずから学際的になってきます。今ではごく当たり前になっていますが、当時としては画期的であった学際的な問題意識を掘り起こしたという功績もありますね。当時のメンバーを見ると、委員長は手塚富雄東大教授、小谷正雄、朝永振一郎、永井道雄、松田智雄等、第一級の学者が入っています。村井資長、後に早稲田の総長になる人もいます。こういう一流の知性を集めて、その人たちがいろいろなプログラムを考えた。「企画委員会」は昭和44年にてできて、5年後の昭和49年に「共同セミナー委員会」になりました。それ以来共同セミナー委員会がずっと続きます。

時代を先取りするプログラム

中嶋 そういうものが原点になる一方、大学も随分変わりつつあるわけですから、これまでの遺産をどういうふうな発展させるかを考えなければなりません。継承すべきものと発展させるべきものは何かということをしつかりと位置付けてゆかなければならないところがこれからの問題ですね。このあいだ開催したSDプログラムの問題でも、大学教員懇談会にしても、これまでのFDプログラムにも、北は北海道から南は九州まで、全国から非常に多くの参加者が来られます。これはやはりプログラムの内容がいいからですね。

絹川 時代の必要に応じているからでしょう。中嶋 今は当たり前になってしまっている、大学審議会の答申に出たり、文部省の文章にも出たりするようになりましたけれど、FDという言葉は、もともと大学教員懇談会から始まって独立したわけですね。この大学セミナー・ハウスが発想の原点になったわけですね。同じように、SDプログラムもここが発想の原点で、おそらく大学間の壁を超えて今後発展していくののではないのでしょうか。今後そういう発展的なものをどんどん打ち出していくことが必要でしょうね。

絹川 そうですね。大学セミナー・ハウスの発想自体が時代の先駆けでしたし、その中の一つ一つのプログラムが時代を先取りしてやっています。そういうことが大学セミナー・ハウスの先進性でしょうね。先ほど中嶋先生がおっしゃったように、どうやってこの営みを継承し、発展させていくか。やはり大学セミナー・ハウスが築いてきた知のネットワークが大切にされていなくて、そういう発想は出てこないわけですね。それぞれの大学の先生方が個々の大学という枠を超えて一緒に考える場をここで持たされているというところが一番大事なことです。大学セミナー・ハウスの運営の責任を担うものとしては、そういう場がうまく構成され、先生方が自由にそれぞれ発想をここで戦わせることができるような、そういう空間作りを心がけなければいけないと思います。

中嶋 いまおっしゃったように自由な発想でいろいろな人がここで意見を聞かせられるのということ、我々はしつかりと自覚していく必要があると思います。これまでもさまざまな意見が共存する場、そういう点がしつかり守られてきたからこそ、大学セミナー・ハウスは続いてきたのだと思います。

絹川 自由にそれぞれが発想すればお互いにクリティカルになりますから、事柄自体としてはやはり厳しいと思います。大学セミナー・ハウスはそういう厳しいさを包含するところであるわけですね。

豊かな自然環境

中嶋 そうです。もう一つ、知のネットワークとともに、大学セミナー・ハウスというものが持つ環境は是非大切にしたいと思っています。東京の緑がだんだん少なくなっている自然破壊が進んでいる中で、このような緑豊かな環境が保全されているということは素晴らしいことだと思います。建物はいよいよ老朽化しているけれど、東京にもこんな緑の自然が残っている、これは大事にしたいですね。今も外に出ると、ヒゲラシや、東の音がうるさいくらい聞こえてきます。これが東京の中にあるというところが大切なことです。先ほどおっしゃったように侃侃諤諤と議論をしても、この自然の中だと心が和むのではないのでしょうか。私が国際プログラム委員会の委員長をしていた時、先生とある女子学生が対立してしまっていて、にっちもさっちもいかなくなっていたことがありました。ところが、その学生がピアノを弾けるといいうことを知って、ピアノを弾いてもらい、最後に蜜



▲絹川正吉館長

の光を皆で合唱したのです。その時、ちよど夕映えの富士山がきれいに見えて、何とも言えない感動があったのです。それはただのセミナーではなく、そういう対立があっただけに、皆感激してこの自然に包まれた大学セミナー・ハウスの丘を去っていった。そんな思い出があります。そこに自然が豊かな大学セミナー・ハウスが持つているもう一つの意味があると思います。動植物が本当に活きているこの自然を大切にしたいと思いま

せん。この自然も当初は今のようには豊かではなかったのですが、皆さんが記念植樹をされ、ここまで大切に育て上げたわけですね。

建築様式の継承と改善

中嶋 ユニット・ハウスや、楔型の本館など、この建築様式も当時としては非常にモダンで、早稲田大学の吉阪隆正先生を中心としてU研究室が設計されました。これもやはり、何とか保存できるところは保存し、また同時に、新しい時代に合ったものを作っていかなければならないと思いま

す。絹川 大学セミナー・ハウスの施設は当時の日本の経済状況下では、ずいぶん立派だったのです。今はあまり評判は良くないけれど、ユニット・ハウスもなかなか洒落たものでした。トイレなどは外にあって、今の人は不便だと言っけれど、その頃は不便とは感じず、むしろ面白かったですね。朝起きて冬など寒い中、洗面所で顔を洗おうとしたらお湯が出るわけですよ。今はお湯など当たり前に出るけれど、当時は給湯するなどという発想は日本にはありませんでした。その時にお湯を出したのです。もう一つ驚くべきことは、便座にはじめからちゃんとウォーマーがついていたという事です。だから、Plain Living and High Thinkingという大学セミナー・ハウスの標語がありますけれど、一見Plain Livingでありながら、えらく変なところが贅沢だったんです(笑)。豊かな施設を作つて、そこで、いわば侃侃諤諤の思想を戦わせる。戦わせないで豊かな環境に包まれて、言ってみれば人間的な確執を残さないで、事柄を事柄として議論できるような空間ができていた。だからやはりある種の豊かさというものがこういう施設には必要なのでしょう。しかし、現在の大学セミナー・ハウスは、日本の生活水準から考えると、いろいろ利用者に不便をおかけして、ご不満が出ているわけですね。この建物全体が大学セ

ミナー・ハウスのある思想性を表現していますので、ユニット・ハウスなど老朽化している建物をどうするのかという事は難問題です。

中嶋 それは大事なことで、大学セミナー・ハウスは今の時代からするとそれほど人を引き付けな物にも反映していただと思うのです。確かに全てをホテルのように集合住宅にしてしまえば楽なこととは事実で、いろいろな経営の合理化のためには必要かもしれません。どこかモデルとしてユニット・ハウスを残しておきたいですね。本館も使っていくけれど、これには大地に知の根を打つというように意味があるでしょう。そういった意味を生かしていく必要がありますね。

絹川 そうですね。大学セミナー・ハウスのシンボルマークは、太い幹が一本あって、それに七つの葉がついている。この七という数字に特別の思い入れがあるのでしようね。七はギリシャの神祕思想の中では特別の数字です。ユニット・ハウスのそれぞれ別の群にセミナー室がついていて、教員と学生が一緒にここで生活をする。そのユニット・ハウスの群が七つある。その七つの根として本館が建つていくわけですね。こういう思想表現を、どういうふうな改めで捉え直していくか。記念的はいくつかのユニット・ハウスの群というのは残した方がいいと思います。

新しい試み——主催セミナーで単位互換も

中嶋 理事長というのは経営面でいろいろお手伝いすることになるわけですが、やはり、できるだけ多くの人に使っていただくように、会員を増やしていく努力をしていきたいと思います。方によつては面白い例ができるはずですよ。大学セミナー・ハウスを拠点とした、新しい大学のあり方を発想し、呼びかけていくことも必要ではないでしょうか。例えば、私はよく大学審議会などで言っているのですが、今情報ネットワークが多層的にマルチメディアを、今後必要です。放送大学でも、あの発想だけで大学を考えると、最後に大学はいらなくなる。教師と学生、学生同士、人と人としての触れ合いもいなくなる。そのうなると、まさに大学は崩壊するわけです。例えば、放送大学の学生たちは、放送大学の施設で授業も受けているけれども、大学セミナー・ハウス

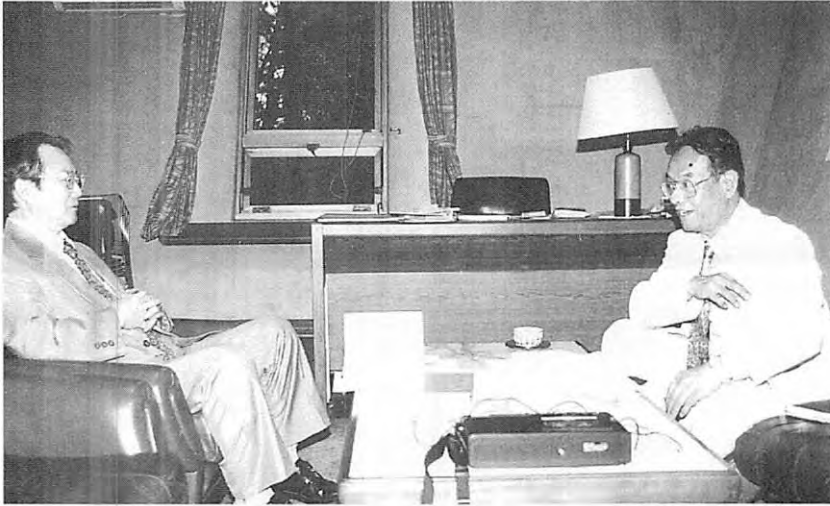
の丘にも来て一緒に宿泊しながら授業を受けるといいと思います。

今後、通信教育だ、やれマルチメディアの世界だということになってくれば、人々との触れ合いはここでできることを条件にする、というようなことはいろいろプログラム化していく必要があると思います。単位互換は各大学間でこれからもっと進みますから、共通授業はここから大学セミナー・ハウスです。単位の認定権は少なくとも各大学にあります。大学セミナー・ハウスの会員校同士で国際学生セミナーや共同セミナーを受講したら何単位になるかというように呼びかけていけば、各先生方はセミを持つていくわけですから、それぞれの大学でする授業がだいたいできます。細切れに二年間授業で聞いて単位にするよりも、少なくともここで2日、3泊り込みで当該テーマを徹底的に議論したら、非常にインテンシブな学習になります。そんなことも将来的には考えていかなければならないと思います。

絹川 単位については、ある一定量の学習がなければいけません。単発の共同セミナーだけでは問題が起るので、例えば、ある共同セミナーを3回同じテーマで通してやる。それをずつと続けて受講した学生に対して単位認定をするといううなやり方で可能かもしれません。多才な先生方がそれぞれの大学から参加しているわけですから、ある共同セミナーをいくつかの大学が協力して運営し、それを受講した学生にはその大学が単位認定をするなど、方法はいろいろあると思いま

今こそ求められる「人的交流の場」

絹川 中嶋先生がおっしゃったように、情報化の時代、情報技術で非常に効率的に知識の伝達が行われますけれども、学習というのは本質的にはやはり人格的なものなのです。ですから、どんなにIT技術が発展しても、顔と顔を合わせて、ある知的な営みをするという事柄の本質的な意味が、失われることはなくて、むしろITが強くなれば強くなるほど、どこかでやはりそういう基本的な知の営みというものが行われていないと、人間の知がゆがんでくると思います。そういう意味で、ITが盛んになればなるほど、それを補完する意味での大学セミナー・ハウスの存在の意味が強くなっていくと思います。そういう大学セミナー・ハウスの機能を協力会員校だけでなく、多くの大学に改めて再認識していただく。協力会員校とい



うものは一緒に大学セミナー・ハウスを運営しようということできたわけですから、もう一度その原点を復活させて、新しい世紀における大学セミナー・ハウスの意味を明確にするような営みを創り出すべきだと思っています。

中嶋 それには、プロジェクトを立ち上げて、具体的に研究してみる必要があるでしょう。やる気のある人が何人かでネットワークを組んでいけばできると思います。今は大学が自由な方向に進む時代ですし、国立大学もだんそういう方向にいかざるをえないでしょう。

絹川 ところで、大学セミナー・ハウスの創設の経緯を見ますと、建設費の大部分は三井銀行会長佐藤喜一郎氏を中心とした財界の支援によつていますが、一割は文部省が出しています。初代の理事長石館守三（東京大学名誉教授）と館長茅誠司

（東京大学前総長）の尽力もあったのでしようが、当初は文部省がそれだけ肩入れをしていたわけですね。最近少し文部省との関係が薄いですね。FDに關しては協力会員校の協力を得て、文部省の予算をいたたいているのですが、直接的に今おっしゃったようなプログラムに対しては文部省から援助していただいてもいいのではないかと思います。

中嶋 私もその点で必要な努力をしてみます。学習のことで、文部省も高等教育だけでなく、生涯学習のこともずいぶんやっていますし、大学セミナー・ハウスも今までと同じことをやっているだけではだんだん利用者が減ってくるかもしれないですね。活性化するためには、新しいターゲット、という意味での経営戦略を考え直す必要があるわけです。それにはやはり、社会人や生涯学習、留學生のことも考えなければならぬと思います。

司会 一度大学を出ても、定年退職後に大学の勉強をし直したいというような方や、学位を取っていないので取りたいという方がいらつしやるようですね。学位授与機構の機能も考慮に入れて、何か工夫できないものでしょうか。

絹川 さきほどお話しした共同セミナーを受講すれば単位になるという、単位認定がきつちつと行われるシステムができ、そこに社会人が来てそれを受講し、何単位取れたということがシステムとしてはつきりできるようなこと、あと学位授与機構でそれを認めるかどうかという問題ですね。今は大学の単位でない認められていません。だから、システムとして大学セミナー・ハウスの英語名である Inter-University がここでできないかということですね。生涯学習時代の大学セミナー・ハウスのファンクションをどういうふうに活かすかです。可能性があるわけですから、それをぜひ考えていきたいと思います。

中嶋 今後経営の再建をし、この自然と知のネットワークの調和を活かすやり方を考えていきたいと思っています。できることは沢山あると思います。それが全部できるかどうかは別としても、きちんと戦略を立ててやれば、かたなりいろいろおもしろいことができるのではないかと思います。

支援の輪を広げよう

絹川 最後の問題はやはり、運営や経営、施設関係の問題ですね。

中嶋 どうしても施設の刷新は避けられませんが、常務理事会でしっかり原案を作っていたいで進めていきたいと思っています。

絹川 この大学セミナー・ハウスの運営の根幹は、一つは協力会員校です。もう一つは、規模は小さいけれども千人会です。基礎になる運営基盤はそれしかありませんから、それを安定させるために、サポートをお願いできるグループのようなものを考えないといけませんね。ユニット・ハウスという思想を象徴的には維持しながら、しかし現在のユニット・ハウスは使用耐用年数を過ぎていますから、整備して時代に合った施設を用意しなければならぬわけですね。そのためにはもう少し支援いただく輪を広げないといけません。

中嶋 とりあえずは募金活動をきちんとやってみることでいいですね。

絹川 協力会員校であることの意味を積極的に考慮し、協力会員校がここを使わないと損だというようなアイデアがないかと思っています。いま文部省を中心に教養教育が盛んに謳われていますが、教養教育の本質というのは知識ではありません。教養というのは人間としての生き方ですから、具体的に教員と寝食を共にするというパーソナリティを介する接触の中から醸成されてくるものです。ですから、教養教育が本当に大事であれば、大学セミナー・ハウスを大切にし、積極的に使う機運が出てくるべきでしょう。「大学の欠を大学セミナー・ハウスが補う」というぐらいに（笑）。

中嶋 大賛成です。ここが皆の共有財産だという意識が最近欠けていますね。会員校にはお金をいただくというだけでなく、かつてのように参加者意識を持っていただくような工夫が必要ですね。

絹川 大学セミナー・ハウスの存在自体、類似のものできてきたし、プログラムも学際的なもので始まったけれども、そういうものはある意味ではポピュラーになりました。ウィン・オブ・ゼムとして埋没してしまつた感じがあります。ですから、大学セミナー・ハウスが個性をもつと發揮させて、もう一度再認識していただく必要があります。やはり広報活動に力をいれていくことが大事ですね。

中嶋 館長はまさに大学セミナー・ハウスの人格的な代表で、絹川先生という適任者を館長に得ましたから、是非これからこいっしょに発展に力を尽くしていきたいと思っております。

絹川 理事長のご支援を宜しく願っています。

最後に失礼ですが、ここで前理事長・館長の佐野博敏先生（現大妻女子大学学長）に、心よりお礼を申しあげます。

司会 本日はありがとうございました。（終了）